りの精神で一隅を照らす

「救える命があれば何処へでも」

AMDA理事長菅波氏に聞く

国際的パートナーシップとは

21世紀は「多様性の共存の世紀」と称され、日本やアジアのみならず、世界的レベルで人々が民族性や宗教観の隔たりを超え、共存共栄できる社会を創成することが、時代のテーマとして重要視されている。

岡山市に本部を構える特定非営利活動法人AMDA（アムダ）では、「開かれたパートナーシップの精神」を掲げ、そのキーワードである「困った時はお互いさま」という相互扶助の考えに基づき、災害や紛争地域において、医療や保健衛生分野を中心に多国籍医師団を結成し、緊急人道支援活動を実施している。

今特集では、医師であり理事長の菅波茂氏より、AMDAの成り立ち、また、現在の活動を通じ、世界的な目線で見た「一隅を照らす」運動の実践や考え方について話を伺った。

AMDAとは

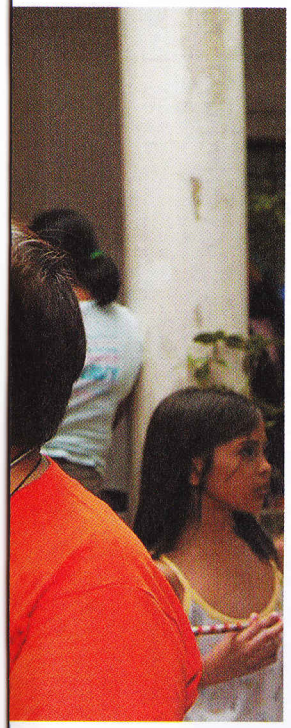
特定非営利活動法人AMDA（The Association of Medical Doctors of Asia）は1984（昭和59年）国際的なパートナーシップのネットワークに基づき、難民や災害被災者に対する緊急人道援助活動を行うことを目的に設立された非政府組織で、当初はアジア医師連絡協議会という名称でスタートした。

現在世界30カ国に支部を置き、日本においては5つのユニットを形成。世界中を網羅するその構成員の正確な数は把握できないほど。

活動の原点は1979年にまでさかのぼる。当時、西日本アジア医学生連絡協議会からカンボジアに派遣された責任感に燃える一人の青年医師がいた。その医師が、初めての難民救援活動において、現地で全く活動できなかった悔しさに端を発する。

当時カンボジア内戦の難民救済において、世界中から救助団体が駆け付ける様子がマスメディアで連日放送され、同じアジアの一員である日本の動向が世界中から注目を受けていた。

それを機に西日本のアジアに関心を持つ医学生のサークルの連絡会が「同じアジアの医学生としてカンボジア難民に出来ることはないか」という総意のもと、医師と医学生のチームを派遣したのが西日本アジア医学生連絡協議会で、その派遣されたチームの医師こそ若き日の菅波茂氏だった。



菅波氏

1枚の写真の影響を受け 1人アジアを放浪

菅波氏がアジアに関心を抱いたのは、高校2年生の夏。太平洋戦争のニューギニア戦線で、一人の日本人青年兵士が、海岸の浅瀬に顔を半分突っ込んで死んでいる1枚の写真を見た時だった。

兵士の死に顔は非常に安らかだったが、自分とそう年の変わらない彼がなぜこのような死を迎えたのかに菅波少年は、ただならぬ疑問を感じた。

彼の死は、太平洋戦争中の数限りない死の一つにすぎなかったのかもしれないが、この写真は結果として多感な青春時代にあった菅波氏に、アジアへの興味を抱かせる結果となった。

1969年、全国に学園紛争の嵐が吹き荒れるなか、当時若者のバイブルと云われていた『なんでも見てやろう』（小田実著）に感化された岡山大学医学部4年生の菅波氏は、この本一冊をリュックサックに入れ、一人アジアへと旅立った。

横浜からバンコクを経由して、シンガポールで下船。ベトナム戦争の中、シンガポールからマレー

AMDAが支援するアジアの子どもたち

菅波　茂

すがなみしげる
昭和21年（1946）広島県生まれ。岡山大学医学部卒。医学博士（公衆衛生学）。東京大学大学院非常勤講師、京都大学医学研究科非常勤講師を経て、現在、日本医師会国際保健検討委員。国連経済社会理事会総合協議資格認定NGO AMDAグループ代表。特定非営利活動法人AMDA理事長。

能力があってもチャンスは貰えない

アジアへの思いと希望

シア、タイ、ビルマ（現ミャンマー）と陸路列車を乗り継いで、インド・アグラにあったアジア救らい協会インドセンターを訪れた。ここに3ヵ月滞在して、ハンセン病研修を受け、その後は、パキスタン、アフガニスタンからまたイランとアジアの各国を放浪した。

研修を受けたアジア救らい協会インドセンターは、日本の民間で設立されたハンセン病専門のセンターで、菅波氏は、ここで初めて国際医療協力の現場を体験した。その後は、まさに放浪そのものの旅を続け、アジアの医療の現状を自身の体をもって体験した。

ビルマの古都マンダレーではピンク色の混濁した筋肉注射を受け、インドのラジギールでは40度の高熱が一週間続いた。アフガニスタンの首都カブールではマトンの肉で胃の調子を崩し、イランの首都テヘランでは体調がすぐれず1ヵ月滞在を余儀なくされた。が、幸いにもテヘラン市民病院の診療はすべて無料だった。まさに身をもっての約8ヵ月に及ぶ放浪の旅だったが、菅波氏は「パンドラの箱」を開けてしまった。その箱の中には、〝多様性のアジア〟という魅力がぎっしりと詰まっていた。

アジアへの思いと希望に燃え、カンボジアに到着した菅波医師の率いる医療チームだが、実際には、全く活動する事が出来ず思わぬ辛酸をなめることとなる。

「タイに難民が流入している」という報道を耳にし、その情報を頼りにタイに入るも、そのキャンプの位置さえ分からない。やっとキャンプを探し当て「当然歓迎される」との思いもすぐに打ち消される。

現地では、活動を受け入れてくれる受け皿さえ無いのが現状だった。何せ彼らのチームは国際社会における難民の保護と支援を取り扱っているのが「国連」の「難民高等弁務官」だという基本情報すら知らず、情熱だけで飛び込んできたのだから。

この時菅波医師の心には、「情報と受け皿がなければ、善意だけでは何も出来ない。そしていくら意欲と能力があってもチャンスすら貰えない」という、現実が深く刻まれた。

しかし今回の経験から「それなら医学生の期間に、アジア各国の医学生と日本の医学生の関係を広げて、情報収集や受け皿になってくれる拠点をつくればいい」と菅波氏は考えた。「そこで生み出された『人間関係と信頼』を大いに活用することが、将来のアジアにおいて医療活動や救援活動に活かしていけるのではないか。

カンボジアを基点に菅波氏の地味な活動が始まった。具体的な活動実績をあげ始めた他のNGOを横目に、友人関係を構築するための国際会議を毎年開催。コツコツと実績を重ねた。そしてついに1980年西日本と東日本の医学生連絡協議会を統一し、アジア医学生連絡協議会（AMSA）を設立。その後医師となった医学生の受け皿としてアムダの設立となる。リュックサック一つを担いでアジアに飛び出してから15年後のことだった。

相互扶助

「困った時はお互いさま」の精神

菅波氏がAMDAの活動を通じ、世界中の人々と交流するなかで、よく問われることがある。

イスラム教圏の人々から「日本人はどうして読んだことの無いコーランを実践しているのか？」と聞かれ、また、イングランドのカトリック教徒からは「なぜ日本人は聖書の中に載っていることを習ってもいないのに知っているのか」と、驚かれることが多いと言う。

これらは、日本人に普段から仏の教えが生活に溶け込んでいる「宗教観に満ちた高い道徳心」のためだと菅波氏は言う。

例えば、日本人の生活のなかには、「困った時はお互いさま」という精神が根強く息づいており、菅波氏の調べでは、約8割以上の日本人が理解しているという。

これは、世界の常識に当てはめると非常に珍しい相互扶助の意識で、諸外国においては、助け合いの意識はあるものの、これはごく身近なコミュニティーのなかでしか成立しないという。

実際に、災害救助活動で現地に入るときは、必ず「何のためにこの場所に来たのか」を明らかにしなければならない。諸外国は日本と違い隣国と地続きのため、何世紀にもわたり侵略や紛争に巻き込まれてきた歴史があり、「タダより怖いものは無い」ということを経験的によく理解しているからだ。

残念ながら国際社会では、説明の無い親切や理由のない援助は侵略の一歩とみなされることのほうが多いようだ。

「助けたいのに助けられない」菅波氏の心のなかで長く葛藤が渦巻いていた。

世界中にあった「助け合いの心」

そんな中、1995年5月にサハリン北部において大地震が発生した。菅波氏はAMDAのメンバーと共にすぐに現地へと乗り込んだ。当然現地ではサハリンに入る理由を問われたそうだ。その時菅波氏は「我々は、今年1月17日に起こった阪神・淡路大震災の時にロシアの人々に助けてもらった。今日は我々日本人がその時にお世話になったお返しとして手伝いに来た」と、救援活動の趣旨を説明した。するとロシア側は、「ありがとう」と言って素直に活動を受け入れてくれた。

その時に菅波氏は「外国でも困った時はお互いさまという意識は存在する」と確信した。海外においては、ごく身近にあるコミュニティーの中でしか「困った時はお互いさま」の意識は存在しない。しかし「助け合いの精神」の心自体は、世界各国に必ず存在する。災害救援活動のみならず、その精神を啓発し、実践を続けることで世界中に国境・民族・宗教にとらわれない広い範囲での「困った時はお互いさまの精神」つまり、「開かれた相互扶助の精神」を広めることがアムダの存在意義だと、菅波氏は心に誓った。

フィリピン洪水の救援活動で現地スタッフに指示を出す

ハイチ地震直後のコレラ支援

大切なのは「パートナーシップ」

サハリンの件を皮切りに、その後もAMDAは世界中での災害等の発生、あるいは紛争による難民発生後にはいち早く現地に駆けつけ「開かれた相互扶助」の精神のもと、医療支援の届きにくい地域や難民キャンプにおいて、被災者や難民を対象に保健医療活動を展開。

特に現地の状況、被災者のニーズを把握するために、被災地に近いAMDA海外支部と連絡を取り合い、その支部等と日本からの医療チームで多国籍医師団を編成し、活動にあたっている。

菅波氏は「救援活動に一番大切なことは、パートナーシップ」であると言う。「困った時はお互いさま」という相互扶助精神のもと、被災者のそばに寄り添い活動する。決して「スポンサーシップ」つまり、「助けてやっている」という気持ちを持ってはいけない。救助を受ける側にもプライドがあり、その気持ちがわかってしまうと被災者の心は必ず離れて行ってしまう」と。

菅波少年に衝撃を与えた日本兵の写真

アジア放浪中、尺八を吹いて交流する菅波氏

「医は仁術」相互扶助の精神で

唐の徳宗（742~805年）の時代に宰相を務めた陸宣公は、「医は以て人を活かす心なり。故に医は仁術という」と言葉を残しており、そのため一般的に「医療」とは「仁術」と称される。

しかし、現代社会においては、「医は算術なり」と医療業界を揶揄するような言葉も多く聞かれ、医師＝高額所得者というイメージが付きまとうのが現実である。

近年国の財政を圧迫し続ける「生活保護費」の問題においても、受給者に医療費の一部負担金が発生しないことを悪用し、必要のない診療と投薬を日常的に行うことによって、莫大な医療費をせしめる医療機関の存在が問題視されているほどだ。

宗祖伝教大師が著された、『山家学生式』のみ教えの中には、「国の宝とは何か。宝とは道を修めようとする心である。この道心を持っている人こそ、社会にとってなくてはならない国の宝である。径寸の宝石十個、それが宝では無い。社会の一隅にいながら、社会を照らす生活をする。その人こそが、なくてはならない国宝の人である（中略）自分をひとまず置いて、まず他の人のために働くことこそ、本当の慈悲なのである」（一隅を照らす運動本部の現在語訳を参照）とある。

現在においても、世界中の若者が「富」より「仁術」を志し、血の滲むような努力を重ね、医師となり活動している。その中でもとりわけ、アジアを中心に世界中の「救える命」のために救援活動する菅波氏や、AMDAのスタッフの生き方こそが、まさに「医は仁術」であり、相互扶助の精神で一隅を照らす実践ではないだろうか。

そして、AMDAの目指す「国際的パートナーシップ」が世界に根付くことで、民族や宗教を越え、人々の共存共栄できる社会が実現できるのではないだろうか。

世界中で仁術を以って一隅を照らす

ハーイ本番です！

<249>

KBS京都
アナウンサー
塩見祐子

今月のゲストは　岡山市に本部のあるAMDA理事長の菅波茂さん。

AMDAは、災害や紛争発生時、世界30ヵ国にある支部の多国籍医師団で医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開しているNPOです。

「高校生の時に太平洋戦争の写真集を見て、そこに同年代の日本兵が南方戦線で死んでいる写真があったんですよ。どうして同じ年頃の少年が日本から遠く離れたところでこんな風に死んでいったのか、とてもショックでしたよ。それから具体的に医師への道を進むんです」。

アジアを旅して各地の医療を見て、世界で医療行為をするには実績が必要とわかり、アジアの医学生の会議を立ち上げ彼らが医師となり現在の活動へと続くんですね。もう40年ほどになるそうです。

「底辺に流れるのは困ったときはお互い様の精神です」。

日本には昔からお互い様という言葉ありますね。震災のボランティアもそう。海外にもあるんでしょうか？

「この気持ちは世界に通じます。ただ、海外へ行くときは現地できちんと話して意思を伝えることから始めるんです。なぜあなたは私を助けるのか、と聞かれるんですよ。見方や考え方が違うと、説明のない親切に対して不安だとか、これは危ないとか思うんですよね。何か裏があるんじゃないかって」。

日本人て寡黙が美徳みたいなところありますものね。

「大切なのはね、助ける人と助けられる人が同じ土俵にいること、助けてあげるみたいな上から目線でないこと、助けられる人にもプライドがあるんです。きちんと伝えればね、たいていの地域や共同体ではお互い様の気持ちが通じます」。

それと、大事なことは現地の人の価値判断がわかった人に任せると言うことだそうです。

「地元にとって何が必要なのか、先々までずっと続けていける援助というのが大事なんです」。

とてもパワフルな菅波さん、若い人にも一言。

「無駄なことをしない人生はノーリスクだけど何も始まらない。日本には自由や平等が最初からあると思っているけどそうじゃない、それはいつも目指して生きていくものなんですよ」。

〈あのひと言〉 続けていける援助が大事

収録を終え菅波氏と歓談する